

パネルディスカッション

著者	池田 潤, 後藤 真, KARLSSON Anders , LAWRENCE Rebecca , 松本 美奈
雑誌名	人文社会系分野における研究評価 : シーズからニ ーズへ : 研究大学強化促進事業シンポジウム報告 書
ページ	101-121
発行年	2019-03
URL	http://hdl.handle.net/2241/00155101



パネルディスカッション

〈パネリスト〉

池田 潤（筑波大学学長補佐室長／人文社会系・教授）

後藤 真（人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館研究部・准教授）

Anders Karlsson（Vice President of Global Academic Relations of Elsevier）

Rebecca Lawrence（Managing Director, F1000 Group）

〈モデレーター〉

松本 美奈（読売新聞記者／国立大学法人評価委員会委員）

松本 お疲れさまです。あと少しです。よろしくお願いします。1人1分ずつですが簡単に今、お互いの意見を聞いた中で感じたことをお話してください。うなずいてもらったので、まずは池田先生からお願いします。

研究の評価

池田 一通り、皆さんの意見を聞いて、私にとって一番、印象に残ったのは結局、研究は誰のものなのか。そこについて、いろいろと考えさせられました。デヴィッド・スウィーニーさんのお話を聞くと、研究者が自分で評価をすること、研究の評価を研究者自身がすることが大事だと強調されていた側面もあります。松本さんは大学や研究も含めて、もっと社会が評価に参加するべきだ、声を上げるべきだと言われていました。

カールソン先生の場合には、そこに対して出版社が果たす役割があるだろうと言われていました。レベッカ・ローレンスさんの場合には、非常にびっくり

しましたが、革命的な全く新しいモデルを提示されました。そこで興味深いと思ったのは、ファウンダーといわれる言葉が出てきました。結局はファウンダーといわれるものが、研究や論文を持つことになる。最終的に論文とは、誰のものなのか。研究は誰のものなのか。きょうは、それを非常に考えさせられました。

松本 ありがとうございます。今、池田先生が言われたことは、本来だったら私が皆さんに確認するべきでした。丸投げでした。失礼しました。後藤先生、お願いします。

後藤 皆さまのお話を聞いた私の感想は、まずは研究の成果とはどのようなものとして定義して出すべきなのだろうか。それをもう一度、改めて考えました。カールソン先生のお話は、基本的に論文をベースにして、その論文をどのようにいかに見せていくか。測っていくかの考え方だったと受け取りました。ローレンス先生のお話は、私が聞いている限りでは、これは論文だけではなくデータや資料そのものも含めて、研究者が出したものをどのように評価していくのかを考えているようなモデルだと考えました。そのように考えますと、われわれ研究者が何を成果として定義して出していくかについては、評価といった文脈の場合にも、もう少し考える材料があるのではないかと感じました。

松本 ありがとうございます。お願いします。

カールソン ありがとうございます。皆さんのプレゼンテーションを本当に楽しませてもらいました。一つ、評価についてですが、目的が必要です。なぜ、評価をするのか。次は、その評価をどのように使うのか。これはもしかしたら、正しいところに投資をしたから良かったのか。社会的なインパクトがあるのか。二つのものを結びつけているものは何なのか。これは誰が評価するかによります。

また、さまざまなモデルを考えていました。出版やジャーナル、学術誌についても言及されていました。実際にデジタルの世界になると、学会誌とは何か、役割は何なのか。これもディスカッションがありましたが、つまるところ研究者が学会をどのようにして評価をするか。自分でどのようにするのか。リワードシステムなどです。これについて、われわれは重要だと考えています。これはディスカッションの価値があります。

ローレンス 私もそのように感じます。多様で、素晴らしいプレゼンテーションがありました。私が聞いていていくつか思ったのは、カールソンさんも言われたような内容ですが、一つは、ゴールは何か。今評価しているゴールが何かを定義することです。インジケーターを使うのは簡単です。ちょっと俯瞰して、何をしようとしているのか、どのような行動なのか、できることはたくさんあります。

評価をして、インセンティブを与えるのか。ゴールは何なのかを考えて、どのような指標が必要なのかを考えます。既に持っている指標もありますが、ない指標もあります。それは作らなくてははいけません。この指標をどのように使うのか。その結果は、どのようなになるのか。これが学術論文や、人々の行動をどのように変えていくのか。これも考えて、評価するべきではないでしょうか。

評価の目的

松本 ありがとうございます。この話を待っていました。きょうは、参加者の皆さんにご意見を書いてもらいました。その中で多かったのは、現場は評価でもう疲れきっている。この一言です。大学を取材するたびに、皆さんが疲れきっているのはよく分かっていました。それはなぜかといいますと、カールソンさんが言われるように何のために評価をしているのか、評価の目的が分からないからです。評価の目的とは何なののでしょうか。ローレンスさんからお願いします。

ローレンス さまざまなものがあります。これは分野にもよりますし、どの学術分野かにもよります。それは研究なのか、プロジェクトなのか。さまざまな評価をするところで変わってきます。ある機関にどのぐらいの投資をするべきなのか。職員を雇うときの判断にも使うかもしれません。さまざまな要素があります。例えば、さまざまな違ったシステムにいくつか場合には、さまざまなタイプのメトリクスをつくって、網羅します。ツールや指標をきちんとつくるのが大切です。このシナリオでは、何を目的にしているかを定義していくこと。さまざまなインジケーターを使って、さまざまな角度で目的に沿ったやり方をする必要があります。

松本 目的に沿ったインジケーターがあれば納得できるとの言い方もあるし、行っているうちにインジケーター自身が目的化してしまう。要するに、はかること自身が目的化する危険性もなきにしもあらずかもしれません。カールソンさん、その辺りについてもう少し言葉を補足してください。どのような目的だったなら納得がいくのか。ご発表の中で、合意が得られないとありました。

カールソン 最初に大きな命題となっていました。ちょっと俯瞰しましょう。一步、下がって考えてみます。私が懸念しているのは、研究者として学术界を代表して行って、いろいろな意見を聞くと評価に疲れていると言っていました。これは心配です。もしもそうだとすると、評価はちゃんとしています、目的に沿っていないかもしれません。もっと大きな図を見てみます。実際、社会がなぜ研究に投資するのかを考えると、これは先進的な知識を得るためや基礎知識を得るためです。

科学を進展させて、より良く健全状態を上げることや生活を良くする。例えば、温暖化でも1.5度以下の上昇に留めることなどが大きな目的なのでしょう。知識を進展させることとともに、社会的な成果も求めるべきです。これに対する課題はなぜ、さまざまな指標がこのシステムに入っているのか。このような研究を支えるものでなくてはいけないはずなのに、トップダウンではなくて研究者たちに協力ができるようにするべきです。

ゴールの話に戻ります。われわれの側でもそうですが、謙虚に行っていくことです。新しい指数を出すのではなく、出せたとしても出してはいけないわけです。これは非常に重要なことです。懸念はあります。皆さんはコミュニティーのメンバーの方たちですが、われわれが評価に疲れていると聞くと、われわれも懸念を持ちます。

松本 研究を支えるものや研究の質を上げるものと、いろいろな目的が出てくるかもしれません。評価される側として評価の現状については、どのように思われますか。

後藤 評価に疲れている点は、まさに事実です。私たちも大変に苦労しているところです。評価は、そもそも目的ではないはずです。評価はあくまでも手段

であって、ある種の目的を達成するために使う道具です。ある目的があったときに本来ならば、その道具をどのように使うかが評価の姿のはずです。今の日本では、ほとんどの場合はそうではありません。最初のプレゼンテーションにもあったように、ある目的に対して評価の道具をつくっているのが現状なのではないでしょうか。ある目的に対して、何か道具を必死になってつくるので、結果的に疲れてしまうわけです。

池田 私は評価疲れの話で印象的だったのは、イギリスの取り組みです。私が理解した限りでは、REFは7年に一度だけです。日本の国立大学の運営費交付金は毎年、変動したりしますので結構、疲れます。REFは7年に一度なので、評価を受けたら7年間は変わりません。その代わり、彼らがブロックグラントと呼んでいる、研究に対する運営費交付金は、ほとんど全てがREFの成果によって決まるとのことです。

何のためか、REFに即していえば、国からの研究費の配分を受けて、機関として研究に投入できる資源をより確保するためです。それは目的がはっきりしているので、疲れようが疲れまいがしななければならないわけです。自分の大学や機関を良くするために必要なことなので、正当化されるのでしょうか。もう一つ印象的だったのは、彼のお話の中でミュージックデパートメントの成績がすごく良かったことでお金がたくさん増えたので、それをバイオロジーに投資をしたとのことでした。

お金は大学に渡しきりで、大学の裁量で自由に戦略を立ててできるところが、すごくうらやましいと感じました。文部科学省の方がいるので恐縮ですが、日本の場合には渡した後で、文部科学省の方からいろいろな制約があります。自由度が低いです。

もう1点、iMDに即していいです。iMDをつくったときの目的はいろいろありますが、見えないものを見えようにすることがありました。先ほどグラフをお見せしました。どこに投稿しても結果が1で同じであつたら、どこに投稿しようかと考えるモチベーションはあんまり出てきません。一番の意図としては、緩やかにでも傾斜がついて、評価結果が変わってくると、研究者も変わる

のではないかということです。今までは毎年、紀要に1本書けばいいと思っていた人が、全国レベルや国際誌にもっと投稿したいと考えてくれる。そのような方向に研究者が変わる。その結果、組織が変わる。ジャーナル自体も、今までよりもっと幅広い人から投稿してもらいたいと考えることによって、ジャーナルも変わっていくのではないか。そのような意味で、研究者や組織、ジャーナルが変わるための一助になればいい。それが一つの目的です。

「評価」が与えた影響

松本 ありがとうございます。ここからは会場からのご質問をぶつけていきます。まずは、ローレンスさんとカールソンさんのお二人への質問です。評価によって、学術界などは変わったか。いきなりですが、そのような大きな質問がきています。お願いします。

ローレンス 今の評価方法は、研究を変えていると考えます。いい方向ではないですが、研究者が自分たちの成果を高く見せようとしています。インパクトファクターやブランドを高めるためにです。成果を全て出すのではなくて、えり好みしているといえます。研究者から聞いたのは、何か興味深いことが発見されたら『Nature』向きの論文を作る。そうすると研究の仕方に偏りが出ます。それは本当に問題です。そのために、われわれが会議室に集まって、研究を再現できないようなレポートもありますが、それも読んでいるわけです。そうすると研究の正当性にも影響します。根本的な問題が今はありますので、もっとフェアな評価ができるようなシステムに変えていかななくてははいけません。

カールソン ちょっとフォローアップしますが今、言われたとおりです。何を測定してほしいか。例えば、出版数の評価はローレンス先生が言われたように、いい方向にいかない場合もあります。研究は、ほとんどの努力と同じように競争が激しいです。ベストを尽くそうとみんなが頑張るので、競争が激しいのはいいことです。問題は、現在のシステムや現在のやり方がベストなのかです。私がある意味で驚いたのは、今でも大学は研究者の評価にインパクトファクターを使っていることです。

出版した場合にIFが出たものは、いくつあるのか。IFは、そのような目的のためにつくられているわけではありません。その利用の仕方が主ではありませんし、そのようなやり方はしたくないわけです。そのような宣言がありましたが、従来のやり方が使われているところがあるので、これは解決しなければいけません。また、報酬システムについても学术界での議論が必要です。この報酬システムは、このような行動に良くない行動も含めて、かなり影響しています。

松本 いい方向に変わっていない。要するに、大学や研究の世界をいい方向に変えていない。お二人からこのような重大な発言がありました。もう帰ってしまいましたが、これは文部科学省の方にお土産に持って帰ってもらいたかったです。お暇な方は帰りに永田町や霞が関に寄って、著名なかたがたからこのような発言があったことをぜひともどこかでご証言ください。今の発言を聞かれて、池田先生と後藤先生はどのように思われましたか。

池田 何でもそうですが、一つの方法やテクノロジーは、できたときには一定の良い効果をたくさん生みます。それが長続きとといいますか。サイテーションベースの評価が支配的である状況が長く続き過ぎたので、それへの表面的な対策ばかりが進んでしまっているような部分も一部ではあります。今は、評価を多様化するべき時期にきているのではないか。同一指標が長く支配し過ぎた弊害です。そのこと自体が悪いのではなく、長く続き過ぎたことでの弊害だと私は考えています。

後藤 私も似たような話になってしまいますが、基本的にインパクトファクターもあくまでの道具です。使い方を誤ってしまうといいますか。だんだんと目的化していった、変な方向にしまった結果でしかありません。多様化もありますが現状としては、まだ評価はインパクトファクターに代わる主要な何かを探している状況にある気がします。そうではない何か-inari方としては、今、池田先生が言われましたが、多様性です。もう少しつけくわえるなら、新たな評価手法が本当にうまくいくのかは、まだ今後の課題です。どうしてもみんな、簡単な答えを探しに走っているのが現実です。

松本 ありがとうございます。ただし、評価は凶器にもなることは否定しません。その一方で、お二人の話にもありましたようにディスカッションやグローバル化、オープンサイエンスの点についても否めません。このオープンサイエンスや研究の質の点について、もう少し補足をお願いします。

ローレンス いろいろなツールが使えます。デヴィッド・スウィーニーさんが言われたピアレビューが大変、究極的に効果のある方法です。そのようなものは、主観性を持っているものであるのは否めません。いろいろなツールを使って、質を見ることはできるでしょう。インパクトを考えると、広い意味でインパクトをはかっていくことができます。一つの結果だけを見るのか。スウィーニーさんが言われたように、いろいろなアウトプットを見て、その全体的なアウトプットがどのようなインパクトがあるのかを見ていくことができます。

ただし、これは簡単ではありません。私たちは過去の経過を見ても、間違ったことをしてきましたので、何を見るべきかを判断していかなければいけません。たくさんの作業をしていく必要があります。例えば、欧州委員会のほうで私も関わっていますが、ポリシーの政策のプラットフォームをつくっています。専門家が集まって、報告書を出しました。オープン・サイエンス・アセスメント・メトリクスをつくっています。これは出発点としては大変、有用です。オープンサイエンスを考えた場合には大変、いいスタートポイントです。

ただし、これは質を見る点で別々に考えてはいけません。質対オープンサイエンスの体系ではないわけです。二つとも同じですので、一緒に考えます。オープンクオリティー・サイエンスというべきです。オープンといわれる言葉を使わずに、自然にオープンであることを見つけていく必要があります。ただし、質的にも量的にも両方の評価ができるような考え方をしていく必要があります。

松本 質をはかることができるわけですか。

ローレンス はい。時と場合によりますが、主観的な質の評価ができます。例えば、先ほど言ったように専門家が集まって、これが素晴らしい、あるいは質の高いアウトプットであると判断することはできます。主観的に評価をして、潜在的にこの論文にどのようなインパクトがあるかをはかっていくことができ

ます。時間がかかってするようなインパクトをはかることができるかもしれません。

これは調整していく必要があります。現在、どのぐらいのインパクトがあるかどうかを見ることは難しいです。少し時間をかけると出てくるかもしれませんが。難しいわけです。ただし、一つのアプローチに頼ってはいけません。いろいろなものを使わないと、評価自体にもゆがみが出てきてしまいます。引用は項目の一つとして使っていますが、ちょっと問題がでています。しかしながら、引用は大変に重要な要素を持っています。2週間ぐらいでアーカイブに出てきたものがありますが、サイテーションの考え方は残っています。

どのような引用なのかを見ていく必要があります。例えば、アーティクルが広いインパクトを扱っている。あるいは、狭い領域でのインパクトだけを見ているのか。引用をもっと賢く使っていくことが必要です。

カールソン 最初にいいたいのは、この見方は質をはかるメカニズムはあります。ピアレビューです。このシステムは長期的に見ても、うまくいっているものといえます。また、自分で直す自己批判や自己調整が出てきます。オープンサイエンスの場合には、一方ではデータを早い時期で共有してより良い使い方をする。透明性も上げていきます。成果を一般の人にも提供することが、オープンサイエンスの意味です。オープンアクセスやオープンデータの話はしますが、オープンサイエンスの場合にはいろいろな点が入ってきます。これは忘れがちです。

サイエンスは、フィルターのようにになっています。引用されたことで、判断基準になります。ダウンロードも同様です。ダウンロードをすることは、読みたい意思が出ています。いろいろなツールや要件があります。ただし、質的な判断を考えた場合に、ピアレビューはプレジャッジメントといってもいいでしょう。他の科学者や専門家がそれを見て、事前に判断をします。学術誌であれば学術誌の中で、そのようなタイミングとしてピアレビューをしていくことになります。

松本 ありがとうございます。ピアレビューで質をある程度は見ることができ

ることは、よく分かります。そうすると今進行している学問の細分化と、流れとしてはぶつかってきます。細分化して、ピアレビューをしようにもできません。特に人文社会系は、ものすごく細かいです。そこで質をはかることはできるのでしょうか。他人事のように聞いている池田先生、お願いします（笑）。

研究を評価する

池田 他人事ではなくて、身につまされる思いで聞いていました。非常に重要なポイントです。ピアレビューシステム自体は、基本的に最後はそれしかありません。人間が読んで決めます。主観的であるのは仕方がないです。意見が分かれたりしますが、質は最終的にはそのように決めるしかありません。それは仕方のないことですが、私がピアレビューによる質の評価の課題といますか。問題点があると思っている点は、特にREFを見たときに二つあります。

一つは、論文のピアレビュー評価は別ですが、REFのような評価の場合はピアレビューで全数評価はできません。全部を読むことは無理ですので、どうしてもサンプル調査になります。ある学部のトップ研究者何名かだけを評価します。それで組織全体を本当にちゃんと評価できたのか。先ほどのiMDの精神に則ると、Leave no one behindの精神にはなっていないのかもしれない。ピアレビューは、手間や時間がかかるために全数評価が難しいです。そのような問題点が組織評価においてはあります。

ピアレビューに対するもう一つの疑問点は、最初に私が申し上げた感想と関係します。研究は誰のものかを考えるときにピアレビューを推し進めていくと、研究や論文は研究者だけのものになってしまいます。プロフェッショナルジャッジメントに対して、他の分野の人や社会の人は違うと言にくいわけです。専門家が読んでいるので、それに対して異議を唱えにくくなります。そうすると専門家がいいと言っていればいい。ともすると、専門家の自己満足的な評価システムに陥ってしまうかもしれない問題点があります。

最初の感想であえて言いませんでしたが私が言いたかったことは、研究や論文は研究者のプロダクトとして、研究者が自分の好きにしていいいものなのか。

それとも公共財として、みんなのためにあるべきなのか。研究は、自分のお金だけでしている人はいません。自分のお金で研究をしている人はアマチュアなので、プロは人のお金で研究する人です。

そこには常に機関のお金や国のお金、税金などのいろいろなお金が投入されているので、研究には公共財としての側面があります。本当にそのような意識を持った専門家がピアレビューをすればいいのですが、そうではない本当に専門的な観点からだけでピアレビューをするとすると、研究の公共財としての価値はどのように担保されるのか。そこは、すごく気にはなっています。

松本 後藤先生、お願いします。

後藤 きょうの私はどちらかといいますと、原理原則をしゃべる立場だと思っています。個人的には少し言いたいことはありますが、原理原則でいいますとピアレビューは、われわれ研究者にとっては守られるべきものであります。それは研究者の大前提として考えたいです。それは学問が学問として、自分たちできちんと進んでいけることを前提に考えなければならないからです。われわれはピアレビューを堅持した上で、ピアレビューの中をどのように改善していくかを考えるほうがよいのだろうと考えています。

例えば、その中でオープン化はすごく大事です。誰がピアの中にいるのか。それはお友達のグループではないことがうまく証明できないといけません。もしくは、先ほど松本さんは分野が細分化していると言いましたが、その点では今の科学研究費補助金は、個人的には良くできていると感じています。今は大きなグラントを取るときには、それ以外の人にも説明ができないといけないような申請の仕組みになっています。そのような形できちんと説明ができる能力を研究者同士で測れるのか。その点も含めて、しないといけません。

われわれは、誰がレビューをしているか。何をどのように測っているのかも透明化されなければいけません。評価といったときに数字もどの根拠で、どの根本的なデータがあって、それをどのように計算したらこの結果になったのか。それがかなり見えにくいことがあります。この統計データの母数は何なのかというのは、非常によくある話です。そのようなものをきちんとオープンにして、

透明化することによって、ある程度の改善ができる。その上でピアレビューは維持するべきだと考えています。

松本 これについてはローレンスさんをご発表の中でも、研究者はコミュニケーションを取る必要がある。ピアレビューとディスカッションの見える化が大切であると言われていました。補足してもらえないでしょうか。その言葉の前提には、研究者はコミュニケートをしていない。ピアレビューとディスカッションの見える化がされていない前提認識があるので、このようなお言葉が出てくると私は受け止めました。お願いします。

ローレンス 全くそのとおりです。査読のプロセスは私たちがマネージしますが、それはその著者を代表しているわけです。われわれを通じて、著者とレビュアーが公にコミュニケーションをします。それによってわれわれが分かったことは、レビュアーが多かれ少なかれ悲観的に見えています。それは公開されているので、彼らにとっても論文をレビューして、しっかりと問題点を指摘する。それを建設的や健全性の高いものだと証明する必要があります。

利害の抵触については、チェックをします。もしも抵触があるならば、明らかなものは全て宣言をするべきです。利害の抵触には問題がない場合もあります。どの分野でも利害の抵触はありますので、それが何かと宣言をすればリーダーの方も納得しますし、背景が分かります。どのような影響力があって、これがああったのが分かります。透明性は重要です。この抵触を宣言しなければ、よくありません。

例えば、親戚や家族がいる。利害関係には、結婚する前の名前が同じなどとはっきりした場合があります。そうではない場合は宣言をするべきです。ピアレビューは、誰がしているか。これは面白いところであります。医学的な分野や人文社会科学など実際に多くの分野の中では、重要な役割があります。公共も関与をすることです。ピアレビューのプロセスで公共は入れませんが、そうするべきだと感じています。

誰がレビューをしているかをはっきりとさせることは重要です。ピアレビューは2、3人や4人がある意見や考えを持って行います。これが主な指標とすれ

ば問題があります。それは少数の人に頼って、判断をさせるわけですから問題です。もっと広い範囲で、公共を入れるべきです。国民を入れるべきです。われわれは、さまざまな学際的な分野を扱うべきです。レビュアーは、さまざまな角度やアウトプットの分野、さまざまな文献の人を入れるべきです。

所有権についてですが、何回か出ました、リサーチファウンダーについては、明確にする必要があります。プラットフォームを資金供与者が所有することです。しかしながら、発表のプロセスには干渉しないことは大事です。私たちのほうが著者を代表して、マネージしています。プラットフォームを所有して、この研究の方向性を管理します。その中で入ってこないようなマトリックスや指標もあるかもしれません。これを管理していくのが、私たちの役割です。

池田 今のローレンスさんの提案は、先ほどの私の疑問に答えてくれました。ピアレビューは専門家が行わなければいけません、専門家だけであるべきなのか。それに対する答えはないですが、ぜひとも私からの提案です。それを Gates open research のプラットフォームで、試してもらいたいです。Gates open research のピアレビューはオープンです。そのオープンプロセスをみんなで確認することができます。そこには専門家ではないパブリックがピアレビュー者として入ったときに、評価がどのように変わっていくのか。それを一つの実験として取り入れてみる。今、言われたことをぜひとも Gates open research で試してもらいたいわけです。いかがでしょうか。

ローレンス 可能性としてはあります。資金提供者ですが、医学の側でパブリック・エンゲージしたい。患者も入れて、レビューをしてほしいと言われました。実際にイギリスの医学学術誌では、論文の中でパイロットとして患者の意見も入れています。どのような感じで、患者のレビューが出るのか。重要なことは、ラベリングです。誰が患者で、誰が専門家なのかをラベリングするべきです。評価をされたときに一体、誰がどのように評価しているかが分かります。評価している人々は、実際に評価していくゴールは何か、そこでどこの部分がピアレビューなのか、どのような目的でしているのかもはっきりすることでしょう。

松本 カールソンさん、とても言いたそうです。お願いします。

カールソン まず数学の中では本当に面白い話なのですが、リーチが発展するブログがあります。ブログの中で、非常に問題が出ることがあります。例えば解法が出て、それが想定外の方で解決された。そのような数学のブログがあります。これが一つの例です。この学術分野によっては、さまざまなやり方がありますが、オープンピアレビューもしました。テストもしました。学会に対して、続けたいかどうかを聞きました。ここで何をしていた、何が変わるかを見るのは非常に楽しみです。

もう一つ、これは分野によります。学術論文の一つの要素ですが、新聞なども政策の策定に貢献できます。

あと二つあります。出版前であるプリプリントは、アーカイブなどが始まっています。生命科学分野ではない例ですが、それが他のプラットフォームでは可能です。その疑問点は、どのようにシステムを構築するのか。これは今、起こっていることですが、われわれが行っているのは、さまざまなタイプの、研究の要素をしているかたがた。例えば、短いレビューや論文があります。これはリンクを付けます。学術誌ですが、これは分類して新しい論文と分けています。これはデジタルなので、分類が可能です。

松本 カールソンさんのお話に出てきた学会ですが、学会の役割も大きいのではないかと。学会は何をするべきなのか。この評価の中で学会の話がちっとも出てこないのが、実は不思議でした。専門家の中でこそ、先ほど後藤先生がピアレビューは守られるべきものだと言われました。その場合に学会が無視されていいわけがないです。学会の役割とは、何でしょうか。今は何をしているのでしょうか。もしも答えられるようでしたら教えてください。

後藤 その前に一つだけ言わせてください。先ほどのピアレビューの話についてです。私はピアレビューの中の要素として、外の非研究者を入れるのではなくて、どちらかといいますとピアレビューが適切に機能しているかどうかのメタレビューや、メタメタレビューのような形にするほうがよいのではないかと考えています。非研究者が個別の論文などをレビューするのは、難しいです。ただし、レビュアーが増えていくので、ピアレビュー疲れが出るのは確かです。

それを追加でお話しした上で。学会の点でいいますと現状では、大きくは二つに分かれます。一つは、国際会議レベルでの学会です。そこでは比較的、きちんと評価に値するような論文のサイテーションや電子化などを進めようとするところはある程度、機能しているのではないかと考えています。研究者の皆さんはそのような意識で出してくるので、それに応えないと学会自体がそっぽを向かれてしまいます。関係者が多そうなのでなかなか言いにくいですが私個人としては、現状では日本の学会の動きは極めて遅いです。

実質的にはこの評価の話を引き延ばしているのは、どこで話をしても大学と研究機関です。とにかく、ずっと考えています。もしかすると出版社も含めてですが、考えています。しかしながら学会にいきますと、相変わらず30年前の20世紀の手法でレビューをしています。投稿してからパブリッシュするまでに1年や2年もかかってしまって、いかんともしがたいことがまだ、あります。本来ならばその部分は考えなければならないですが、現状としては研究者もみんな、自分たちの大学のほうで手いっぱいになっています。

松本 今、カールソンさんがうなずいていましたが、ご覧になっていてそうなのですか。

カールソン 私からは、二つあります。日本は非常に重要なグローバル・リサーチ・コミュニティの一部になっていますので、重要な存在です。積極的に国際的なリサーチ・コミュニティに参加することが必要です。メトリクス指標の提案をして、議論をし、より幅広く学会で議論することも必要です。その指標が採用されたら、幅広いコミュニティで議論が必要です。そのようなことを目指さなくてはいいけません。それが早いか遅いかでいいますと、いろいろな変化が国際的レベルで国際的な場では起きています。特にファンディングです。隣の国で研究への資金がかなり使われて、経済成長が促進されています。そうすると学会の風景も変わってきています。これは重要です。7パーセントや6パーセントの年間経済成長があるとお金は出せます。1パーセントの場合に比べると、それは明らかです。必ずグローバルで、強いハブにつながっていることが重要です。そうすれば自分たちの科学が発展していくはずですよ。

松本 今までの話を整理していくと、日本の場合は評価が特にお金とつながっているために評価自体が目的化している。その結果として疲弊感が広がって、お二人も言われましたように研究の質の向上にはつながっていません。インパクトファクターにつながるほうに偏りがちであるところのご指摘がありました。ここまでの話に付け加えて、ここのところをもっと聞きたい。このような質問をしたい。時間がなくて、こちらも全く消化はできませんが、フロアからもう質問をお願いします。ご遠慮なくお願いします。所属とお名前をお願いします。

参加者からの質問

逸村 筑波大学の逸村と申します。大変、興味深いお話でした。どなたにではありませんが最近、はやりのプレデトリーに関しては、今の話の流れからしていかがでしょうか。ハゲタカ出版といわれるものです。

松本 どなたかお答えになりたい方はいますか。

カールソン 最近、日本にジャーナルのマネージングディレクターの者が来ました。それらの雑誌についてはスロッピージャーナル、だらしないジャーナルという言葉を使っていました。学術誌もいろいろあります。悪い意図のものばかりではありませんが、内容があんまりないようなものもあります。スロッピーであるわけです。慎重にならなくてはいけないのは、スロッピーといわれるものと、悪意のあるものがはびこって、いい学術誌がつぶされないようにしないといけません。チェックが必要なわけですか。

ローレンス Think Check Submitといわれるツールがあります。これは研究者が論文を提出するときにハゲタカではないことを確認するためのものです。私のレスポンスはどうかといいますと、透明性が鍵です。透明性の高いモデルがあれば査読はオープンになりますので、誰が査読をしたかが分かります。それが分かりますので、ハゲタカのシステムは避けられます。これは非常に役に立ちますし、問題が解決されるのではないかと私は考えます。

松本 お願いします。

池田 言わないほうがいいかもしれませんが、あえて失礼なことをカールソン

さんの前で言います。カールソンさんが言われたように、結局はレベルが高いか低いかという意味での弊害もありますが、それ以上に弊害なのはお金を取ることです。ハゲタカジャーナルの一番の問題は、論文を出したい人をお金もうけの目当てのために利用しているところです。その背後にあるのは、Elsevierや多くの電子ジャーナルが高額な課金をしているビジネスモデルです。ハゲタカジャーナルは、それを利用した動きになってしまっています。Elsevierや電子ジャーナルがもしもそれを一切、廃止したらハゲタカジャーナルは成り立たなくなるのではないのでしょうか。すみません。失礼ながら一言、申し上げました。

松本 お願いします。

カールソン 話し合いは大変、面白いです。ハゲタカのところですが、価格の話が出ました。私は、この価格は低いと言いたいです。ちょっと心配になることですが、ハゲタカのほうからリクエストがいっぱいきます。そうすると私に500ドル払いますときて、パブリッシャーが短期的には透明度がないわけです。誰であるかもチェックできませんし、それはまずいです。

ここでの問題点は、商業的なアクターがいることです。このコマーシャルアクターがいることをいいますと、何でも買えます。例えば、私は物理学者ですから顕微鏡やコンピューターを買うことがあります。それをコマーシャルアクターが所有しています。つまりは商業ベースの人たちが売っているの、そこで影響が出てきます。何かありますか。

ローレンス おっしゃるとおりです。同意します。出版はお金がかかるので、資金が必要です。どこからか資金を得なければいけません。ただし、いっぱい話し合いをしています、他の方法を見ていきます。出版の資金源をどこか他のところから出す。平等性を考えます。確実に全てのリサーチャーが研究成果を出版できるような状態の平等性を保つことが必要です。

資金源がゆえに差別が出ることは避けたいです。

松本 ありがとうございます。他にいかがですか。

秦 東北大学を退職している秦と申します。最初から聞いていて、二つの評価が混同している感じがします。学術論文のピアレビューと学会誌。これはピア

レビューと専門家の判断以外にはまず、ありません。

ポストトゥルースといわれる中で、専門家の中でも激しい対立があるのにパブリックとは一体、誰なのか。それは学術研究の中身を社会的な政治紛争の中に放り込んだだけで、何の意味もありません。これを堅持することを言わなければ駄目です。パブリックの持っている公共的な価値は研究者や専門家が判断をして、巡ることで初めて公共財になるわけです。その目をくぐらなければ、ごみくずとがらくたと政治的なプロパガンダの塊といっても差し支えありません。これは、しっかり守ることは評価でももらいたいです。

もう一つは、インパクトファクターがおかしく使われているのは全くおっしゃるとおりで。これは何かといいますと、政府がインパクトファクターを採用すると決めています。20年前の評価の議論では、インパクトファクターは慎重に扱うとすることが、医学研究のガイドラインでした。それが投げられてしまった。それはなぜ投げられるかといいますと、政府がお金を配分するときに中身が分からないために、数でしかはかれないからするわけです。そこに根本的な問題があります。

池田先生が言われたようにイギリスの評価は、ファンディングでお金がきた上に、プラスのお金を配分します。日本は普通にきている最低限の生活費を削って評価に回すので、大問題です。ここのところがきちんと整理されないと、非常にまずいです。あえていえば、研究者は自分の分野で、誰が素晴らしい研究者かは数量化データがなくても、みんなが分かっています。これは皆さんもそうでしょう。これは常識です。それが分からないと研究者にはなれません。以上です。

松本 池田先生と後藤先生から何か補足することがあればお願いします。

池田 全くそのとおりです。ありがとうございます。

松本 こちらは、ご意見でした。ご質問はないでしょうか。評価は、確かに混同されています。お金を取るための評価と研究の本質そのものの評価がごっちゃになっています。今は、まさに基本的体力を補うための評価に訳の分からないインパクトファクターなどが使われているために混乱が混乱を呼んでいる状態

です。他にご質問はありますか。だんだんと悲しい話になってきました。青木先生、お願いします。

青木 カールソン先生に質問します。先生は、先ほど日本は非常に大事な研究の、グローバルコミュニティーの一員であると言われました。私もそのとおりだと思いますが分野によっては、例えば物理学。いわゆる自然科学一般は、世界の共同の中で研究をしていかないとできません。問題を共有していきます。ただし、例えば日本の考古学や日本の歴史。人文社会科学の中でも、特に非常にドメスティックな研究のところでは勝負をしている研究者もたくさんいるわけです。僕は大事だと思いますが今、そのような方も同じようにグローバルコミュニティーの中で、それをどのようにグローバルコミュニティーの中で捉えているのか。何かお考えがあれば教えてください。

カールソン ありがとうございます。大変、いい質問です。私はプレゼンテーションの中で、いろいろな研究分野での、多様性の話をしてきました。これは日本でも同様です。私はスウェーデン人ですが、スウェーデンでも同様です。スウェーデン語で出版することがスウェーデンでは多いです。それを目に見えるように、ローカルで何をしているか見える化をします。翻訳家や通訳家の人たちの援助を得て、現地のものを翻訳していきます。

そうすると関係各位、コミュニティーがコンタクトをしてきます。同じような形で、全てがうまくいくとはいえませんが、それをみんなが使えるとは考えませんが、電子工学の話を書きます。その地域の産業に有用なものを書くことがありますが、日本語で書いたほうがやりやすいこともあるかもしれません。電子工学であっても日本語などを書くわけです。目的としては、その地域に貢献することがあります。

後藤 私はもともと日本史や日本古代史を専門としています。ただし、今はデジタルヒューマニティーズの研究の中にいますので、国際会議にデジタルの手法をもって、日本の独自性とデジタルの共通性を持って、海外でちゃんと発表をしないと研究者として評価をされないことがあります。いくつかの使い分けのようなことが出てきます。日本史の細かい部分の話は日本語でちゃんと研究

をすると同時に、ある程度のデジタルのような世界的に共通の手法については英語が必要になります。場合によっては、歴史理論も日本語ではない方法が必要かもしれません。ここはまだ難しいところがありますが、日本における理論のようなものをきちんと国際的に発信することによって、日本史や日本文学のような人文社会も国際的なコミュニティの中にはきちんと入っていけるだろうと考えています。

松本 ありがとうございます。

青木 その際の共通言語はなんですか。

後藤 現状では個別の話については、その地域の言語であるのは大原則です。アメリカの研究者も日本史のことは日本語の論文誌に出します。ただし、現時点ではデジタルヒューマニティーズや理論になると、どうしても英語にならざるを得ないのは確かです。ただ、デジタルヒューマニティーズの学会は、非常にダイバーシティを重視していますので、さまざまな言語の受け入れは行おうとしています。

松本 ありがとうございます。もう終了時刻とのことです。しかしながら、ここであえて1人30秒ぐらいでメッセージをお願いします。ローレンスさんからお願いします。

さいごに

ローレンス 私のメッセージとしては、われわれはテクノロジーもあって、違ったやり方ができると考えています。大胆にするべきです。まずは、さまざまなやり方を試行錯誤してみることです。必ずしも全て変えることにはならないでしょう。少なくとも小さい例からスタートして、学んで、うまくいかないことを学習して行っていきたいです。世界中では、いろいろなことが起こっています。ヨーロッパでもアメリカでも同様です。このようなかたがたとは協力をしていきたいです。科学とリサーチはグローバルです。普遍的なものなので、これは一緒に解決していきたいです。

カールソン 彼女が言ったことにプラスして言いたいのは、継続してオープン

サイエンスを推進していくことです。日本にとっては重要です。さらにさまざまな分野の多様性に敬意を払うことです。Society5.0は非常に大事です。これはテクノロジーのためのものだけではなくて、テクノロジーを適用して、ツールとして利用します。方法として行って、社会科学分野で使おうではありませんか。

後藤 私は現時点で、まだ人文社会科学の研究そのものが社会に見えていないと考えています。個別の書籍などはたくさん出ていますが、人文社会研究は何をしているのかのプロセスを含めた全体像はまだ見えていないのではないのでしょうか。それをきちんと可視化していくことは、極めて重要です。その中で、評価も一つの道具として使えるのではないかと考えています。ぜひとも人文社会科学をより可視化できるように進めていきたいです。

松本 ありがとうございます。池田先生、お願いします。

池田 一言でいえば、松本さんが言われた「思考を停止しない」ことです。きょうも答えは出ていませんが、いつも考え続けること。どのように評価をするべきか。それを何のためにするのか。それをわれわれが問い直し続けることは大事です。その背景にあるのはきょう、最も衝撃的だったことは「ジャーナれない世界」を考え始めなければいけないという指摘です。最近のトヨタ自動車のテーマは「車のない社会」で、トヨタ自動車はどう対応するかを今、必死に考えているらしいです。われわれもそのような時代にきているのではないかと。そこで大事なのは、思考を停止しないことです。ありがとうございます。

松本 ありがとうございます。会場の皆さま、たくさん質問をいただいたのに全部をご紹介することができませんでした。大変、申し訳ございません。改めてお礼を申し上げます。評価は避けては通れません。疲れます。本当にうんざりですが、これをどのようにすれば学問の発展や、より良い社会にするために使えるのか。それをこれからも皆さんと一緒に、思考停止をしないで考えていきたいと心から願っています。きょうは、長時間にわたってのお付き合いありがとうございます。会場の皆さん、4人の勇気あるパネリストたちに拍手をお願いします。ありがとうございました。